

「環境・共生・協働のコミュニティー教会の将来―」研究会

## かけがえのないのちに向かって 共に生きる教会を目指して

佐々木 炎

「ホッとスペース中原」は、神奈川県川崎市中原区にあります。1998年10月に「中原キリスト教会」というキリスト教会の開拓と同時に始まり、宣教の一環として今日まで続いています。この活動は、「誰もが、かけがえのない尊い存在であるゆえ、失ってはならない共同体の仲間である」という認識に基づいています。ですから、地域の人たちの苦しみを、他人事ではなく「共に苦しみ、共に耐え、共に生きる」という『コンパッション (compassion)』という言葉掲げて続けています。

名称の「ホッと」には、私たちの活動で「ホッとしたい」「ホッとあたたまって欲しい」という願いが込められています。私たちは、一人一人というミクロにかかわることによって、社会全体というマクロが生まれてくると信じています。

ホッとスペース中原の活動の場所は当初からキリスト「教会」の建物です。教会といっても開所当初は、古びた賃貸物件の1階、約20坪の場所を借りて始めました。日曜日以外の礼拝堂で、介護保険がない時代でしたが、高齢者の集うデイサービスを始めました。私ともう一人のスタッフ2人で、定員8名ほどの細々とした活動でした。それから活動は27年余り続き、現在では職員は約90名（キリスト者は40%程度）、ボランティアさんや地域の人たち、そして困難を抱える当事者とその家族との協働（Co-production）で続いています。

活動種別としては、高齢者支援（通所介護・訪問介護・居宅介護支援）、障害者支援（グループホーム・訪問支援・計画相談）、子ども支援（親子ひろば・訪問介護・放課後等デイサービスが2026年度開所予定）、困窮や生きづらさ支援（親子食事会・フードパントリー・成年後見・触法支援等）です。産まれる前の赤ちゃんからお墓に入る人までの幅広い対象の人たちに関りを持たせていただいています。通所介護は一日32人定員、訪問介護で一日30人ほどのお宅へ訪問、フードパントリーは一ヶ月約200世帯へ配布、ケアマネは約120件、グループホームは32人ほどが暮らし、そのかわりは今も広がっています。

特に5年前、最寄りの駅より6分ほどの場所に100坪の土地を借り、約3億円

をかけ、4階建の教会を建てました。その教会の3階や4階には誰もが住むことのできる場所を用意しました。20㎡のワンルームや50㎡の2DKなど12部屋があります。また、教会周辺にも賃貸アパートやマンション、一軒家を借りて約40人以上の人たちと共に生きています。一般的な福祉では、高齢者は高齢者だけで住む、障害者は障害者だけで住む、子どもは子どもだけで住むことが普通となっています。ところが私たちのところは、それらを脱却し、高齢者（認知症・看取り期の人等）や障害者（身体・精神・知的・発達）、刑務所や少年院から出てきた触法関係の人たち、児童相談所の一時保護の子どもたち、精神科病院に長期入院されていた人たちが互いに助け合いながら共に生きる多世代型『シェアハウス』にとなっています。

先月、私たちのシェアハウスに住むAさんという20代前半の女性が相談にきました。

「新しいいのちを授かり産もうか悩んだけど、産もうと思う。」

Aさんはいつも態度がぶっきらぼうであり愛想がありません。一見すると健康そうに見えますが、幼少期に親から虐待を受けトラウマを抱えています。精神を患い、働くことができない状況で、生活保護を受給して生活しています。知的に障害があり、9歳程度の知的レベルです。その上に、彼女が産もうとしている子どもの父親が誰か分からないというのです。このような状況でAさんは子どもを産んで育てたいというのです。

私たちは「こんな状況で子どもが産まれることが良いだろうか」と考えるのが常ではないでしょうか。母親になるAさんが経済的に、精神的に自立できていない中で、子どもを育てられるのだろうかと思し、否定的な思いが湧き上がります。

その深層には、子どもは夫婦で育てたほうが良いとか、子どもは愛しあう夫婦から産まれないといけない、子どもの夫が誰かが分からないで産むのはいかがなものかなどの価値観があるのです。

実際にAさんが私に相談した後に行われた支援者会議では、「子どもはおろせないのか」「Aさんは障害があり、とても育てられない」「彼女の母親も育てられなかったのも、本人も無理だろう」「産まれたら母子分離をさせたほうが良い」など、専門職と呼ばれる人たちからAさんの出産に対して反対する意見が出たと報告がありました。私はその報告を聞き、怒りに似た感情が湧いてきました。

1994年、エジプトのカイロで国連会議「国際人口開発会議（ICPD）」が開催されました。そこで「リプロダクティブ・ヘルス／ライツ（性と生殖に関する健康と権利）」という考え方が提唱されたのです。一人一人には尊厳があるゆえに、人々が安全で満ち足りた性生活を営むことができること、生殖能力を持ち、子どもを産むか産まないか、いつ産むか、何人産むかを決める自由、自己決定権があるということが明確にされたのです。残念ながら日本において未だに批准されていませんが、当然ながらAさんにも、この権利があると思うのです。

障害のある人を英語で「Challenged（チャレンジド）」と言います。神から挑戦という使命や課題、挑戦するチャンスや資格を与えられた人という意味で使われています。

障害のあるAさんは、援助や憐れみを受けるだけの非力な社会的存在ではない、と「Challenged（チャレンジド）」という言葉は伝え、私たちの認識を揺さぶり、新たな世界へ誘っていくのです。Aさんをはじめ、障害があるゆえに体験する様々な困難なできごとは、障害のある人が自ら痛みや苦しみを受傷しながら、私たちに問いかけているのです。そして、その問いに向き合うとき、障害のある人たちとは、私たちや社会に多くの恵みを与えている預言者であることに気がつくのです。私たちは「Challenged（チャレンジド）」の人たちからの宣教を受け損なっているのです。

私たちのもっている狭い正義や認識が人に苦しみを与えるのです。

ですから私は、すべての人は人間としての尊厳があり、価値あるかけがえのない存在として、無条件でこのAさんに対して両手を広げて歓迎をしたいのです。

時代が移り、もしかしたら彼女は「子どもなんか産まれてこなければ良かった」と悲嘆に暮れることがあるかもしれません。また、「この子さえいなければ」と失意のどん底で悔いることもあるかもしれません。

子どもは、「お前が母親でなければ良かった」と吐き捨てる時があるかもしれません。また、「オレなんか産まれてこなければ良かった」と自分の存在を否定するかもしれません。それでもなお私は、Aさんの今の「意志」に応えたいのです。

ジャン＝ポール・サルトルという哲学者が書いています。

『人の決断は私的ではあり得ず、常に全人類への責任を負い、連帯している。』

人がなにかを選択するとき、それは大きな運命に導かれ、果たすべき使命となり、

抗うことのできない宿命へ、そして「grand design (グランドデザイン)」へとつながっていくというのです。だから、いつでも、どんなときでも、誰でも、すべての人の決断を両手広げ、精一杯歓迎したいのです。

社会は英雄や成功者から何かを学び得ようとしています。でも、社会の周縁にいる人の、社会から小さく主要ではないとされることに、人間の本当に大切な神の働きが隠されているのだと痛感するのです。

今冬、国内最難関大学院を卒業したBさんという26歳の男性が遺書を残し自死しました。

「ASD (自閉スペクトラム症) の私には、この先、絶望しかありません」

「障害」があることは不幸なのでしょうか。神は「障害」を創ったのでしょうか。そうではないのです。障害は社会が創りだしているのです。そして、私やあなたという私たち一人一人が創り出しているのです。Bさんは「障害がある」ことにどれほど深淵の絶望にあったのでしょうか。

ある30歳代の身体障害者Cさんが私に告げました。

「もうこれ以上親に迷惑をかけたくない。だから私が親にできる最大の親孝行は、親よりも先に障害の私が死ぬことです。だから早く死にたい」

この身体障害者のCさんも、先の20代で子どもを産もうとしている知的障害のAさんも、国内最難関大学院を卒業した26歳の障害のあるBさんそれぞれの苦しみは、私たち社会が生み出しているのです。潜在的に根を下ろしている私たちの「認識」が、罪(的)外れの根源なのです。生きることそのものに生き詰まり、息が詰まる社会を私たち自身が創り出しているのです。そして、私たち自身もまた、生きる力が削がれ、生きにくくされているのです。

社会に目を転じれば、困難に直面する人が多くいます。苦しくて窒息しそうな閉塞感に覆われている社会を解除してくれるのは実は、社会から小さくされ、窒息しそうな周縁にある人なのです。

社会の周縁に追いやられた人が「メタノイア (視座を変えていく)」することではないのです。私たち自身が周縁者と共にあることで、認識や価値観、考え方を「メ

タノイア（視座を変えていく）」されていくことなのです。

「われらの罪を許したまえ」

ここに立つことでようやく、本来のあるべき社会がスタートしていくのです。

私は今年のクリスマスイブの夕方、高齢者のデイサービスの送迎の運転手として車のハンドルを握っていました。車内には7人ほどの認知症を抱えながら、それぞれの背景を背負い生きている人たちがめいめい乗車していました。その中に一人、Dさんという89歳の女性がいました。Dさんは決して経済的には豊かではない、認知症の人です。Dさんは戦前の四国で生まれました。ご両親はDさんが幼少期に商売をしていました。人の好い父親は、知人の借金の保証人となり、多額の借金を背負うことになりました。そして、Dさんが6歳の時、両親と弟の4人、夜逃げ同然で横浜に来たのです。その住まいは今にも潰れそうなアパートだったのです。1年後、父親は失踪し、Dさんは母子家庭となりました。Dさんは貧しい自分の家庭を助けるために中学を卒業すると住み込みのお手伝いとしてある経営者の家に住み込みました。その家庭はとても優しく、初めて人間らしい生活を体験しました。Dさんは今でもその恩は忘れないのです。その後、Dさんは結婚し、一人娘を授かり、いつしか母子家庭となりました。そして現在、生活保護を受け、認知症で曜日が分からないだけでなく、排泄も自分でできなくなりました。記憶は認知症で消えていくばかりです。このDさんが、2024年のクリスマスイブの通所介護の送迎の最後として私が運転する車の後ろに同乗していました。

私が無気なく語りかけました。

「今日はクリスマスイブの12月24日です。デイサービスのある教会で今日はキャンドルサービスがあるんです」

するとDさんはこう応えました。

「あら、そうなの。懐かしいなあ。私が住み込みで働いていたとき、その家の家族がクリスチャンだった。12月24日、クリスマスのキャンドルサービスに誘われ、生まれて初めて教会に行った。そこで歌ったクリスマスの曲を今でも覚えている。そして、イエスという方が私のような貧しい者のために救い主として生まれたことを知って嬉しかった」

私は「一緒にクリスマスの曲を歌いましょうよ」と歌い始めました。

きよしこの夜 星はひかり すくいの御子は まぶねの中に ねむりたもう

いとやすく

車のバックミラー越しに賛美を口ずさむDさんを見ると、涙を流し歌い続けていました。私はその姿を見て、このできごとの真理に気づかされ、嗚咽する衝動を抑えられませんでした。

聖なる夜 救い主が 確かにここにもお生まれになった・・・

冬至近くの夕暮れの送迎になると外は闇が覆っています。同時に、Dさんの過去にも、その人生にも、生活にも、病いにも、未来にも闇が覆っていました。でも、にもかかわらず、だからこそ、Dさんの人生に確かに救い主は共にあり、今日ここにも居られることを知ったのです。Dさんは人生を恨んだあとき、運命を呪ったあとき、苦しみに息苦しかったあとき、そして、Dさんが私にも語り得ていない、自ら秘めている生活の底点の場所に、救い主は確かに居られたと思います。また、Dさんが日々嘆く、「人のお世話になるばかりで申し訳ない」「忘れることばかりでつらい」「ひとりぼっちで淋しい」「早くお迎えが来ないかしら」のなかにも、あの方は耳を傾け、ここに居られるのだと思いました。

この先、Dさんは認知症によってこのクリスマスの記憶は失われるかもしれません。愛する娘のことや、自らの名前すら忘れてしまうことが来るかもしれません。それでも、ここに居られ、あの十字架の上で苦しみを味わった方が、これからも釘打たれた傷の手でDさんを手放さず、漆黒の闇に流転しても、彼の地までDさんと共にあることを確信しました。

きよしこの夜、また、この私も、Dさんという存在を通して、あの方がお出でになった気がしました。その頃の私自身は、自らの能力の無さに否応なしに気づかされる日々で自信を失っていました。小さな組織の経営が上手くいかず、マネジメント力のなさに焦りを感じていました。また、特に優れた点も見いだせない自分が、ミッションを実現するために身を粉にして働いてきたために、満身創痕で体調がすぐれない日々でした。圧倒する現実と先の見えない社会で、自ら背負った借金のうえに、さらに6500万円の融資を銀行から受けて新しい事業を手掛ける重荷に、小心者の自分が否応なしに顕在化し、立ち往生していたのです。でも、あの方は、ビジョンが描けず、何をどうしたらよいか分からない私に、認知症のDさんを通して私の傍らに来られ、自信のない小心者の私の涙を共に担ってくださり、歩むべきビジョンを確かにされたと感じたのです。

社会構造の変化によって多くの人が人生や生活に傷みを抱え、一人一人の尊厳が脅かされています。生活保護受給者は201万3,327人(2024年7月)、働いているにもかかわらず、年収が200万円以下の貧困状態にある労働者は約20%(2023年)で、物価高で困窮する人は増える一方です。障碍にある人は1160万人(2023年)で人口の約9.2%です。児童虐待も、不登校も、長期学校欠席者も増え続けています。ひきこもりの人は146万(2022年)と推測されています。2025年には、何らかの支援が必要となる75歳以上の「後期高齢者」は、国民の5人に1人となります。困難や生きづらさに直面する人が、今後ますます増え続けるなかで私たちはどのように変わっていくべきなのでしょうか。

一人一人の困難は、個人や家族が脆弱のではなく、社会が脆弱であることが主な原因です。誰もが社会の脆弱性(vulnerability)を担わされて生きざるを得ない構造の結果なのです。

一つは、新自由主義の行き過ぎです。財政難を謳う我が国はなるべくお金を出さないで、自分のことは自分で責任をもって生きてもらうということが基本になっています。しかし、基本は一人一人、国に支えられる権利があり、国は責務を負っているという原理原則があります。

二つは、支え手の減少です。少子高齢化となり、支え手が減少しています。また、家族構成の変化もあります。2022年における国の調査では、平均世帯人数は2.25人と出されています。国立社会保障・人口問題研究所の推計によると、日本の平均世帯人数は2033年には、1.99人になると予測されています。個人を支える家族機能が低下しているのです。

三つは、地縁・血縁・社縁の絆が弱まり、無縁社会となり、支えあい機能が低下していることです。社会が弱いということは、個人と家族の幸福の条件整備が整っていないことの結果であるのです。血縁・地縁・社縁などが失われ、新しい時代に順応した『支縁』という「つながり」が形成されることが求められています。

個人も、家族も、地域も、国家も脆弱な中であって、ともに生きることを目指す教会はとても重要な位置を占めていると考えます。しかし、その教会の現状は悲惨な状況にあります。多くの教会が存亡の危機にあります。教会の平均人数はコロナ渦を経て、ますます衰退の一途を辿っています。

様々な処方箋が出されますが、私は古くて新しい、「自分を愛するようにあなたの隣人を愛しなさい」という「隣人愛」を時代に沿って考えることだと捉えています。今風に言えば、「共生・協働のコミュニティを構築する」ことに教会の未来を託したいと考えます。この考えは、国の示している「地域共生社会の実現に向けて」(<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000184346.html>) と方向性は同じであると考えています。

「キリスト」は現在、「教会」という形態で存在しています。その「教会」は、生ける「パン」や「ぶどう酒」として、信じている人や懇意にしてくれる人、仲間や会員だけに与えるのではなく、すべての人に無条件で与え続けています。

「いかなる人も、人間すべてに普遍的に共通する価値をもっている。この普遍的に共通する価値は、創造主である神がわれわれに与えたものである。したがってこの価値は、ある人が身体に障害をもっていたり、経済的に失墜したり、さらに社会的に失敗したりしたとしても、公的扶助を申請する者でも、捨て子でも、また街の居酒屋の裏口に寝そべるアルコール依存症者でも、あるいは精神病院で暴れる患者であっても、人間としての尊厳と価値をもっている。たとえ、社会的な落伍者であっても、神の形になぞられて創られた同じ人間である。また、天にましますわれらの父から永遠の愛を受けた申し子であり、天国を受け継ぐものである。」(F.P. バイステック (尾崎新 他訳) 『ケースワークの原則』誠信書房 2006年 114・115頁より)

誰もが例外なく、神にある尊厳と価値をもっています。神に造られ、愛され、神の子でとされ、天国を継ぐ者なのです。

「誰でも、来て飲みなさい」(ヨハネの福音書7章37節)。

神は、見返りを求めず、誰も例外なく招き、自身という「パン」と「ぶどう酒」を飲食させ、回復を願い、あらゆる手を尽くし成し遂げようとしています。

あなたにも、あの人にも、そしてあの人をも招かれています。そればかりか神という方は待つだけではありません。イエスを遣わし、人となって来られました。その上に羊飼いのように、見失われた人を探し出すまで命がけで私たち一人一人を求めているのです。



「community」という言葉は英語だけではなく、ドイツ語にもあります。ドイツ語で「community」は、地域社会や共同体と同時に、キリスト教の教区、教区民全体を表現します。つまり、教会が地域そのものであると考えることができるのです。すべての人は教会にすでにつながっているのです。その教会に連なる掛け替えのない一人一人の「いのちに向かって共に生きる」それが教会なのです。

私たちは、周縁に置かれてしまっている人の“ため”ではなく、“共”を超えて、“側”に立ち続け、存在を重ね、耳を傾け、キリストに出会うのです。そしてその働きに協働するのです。私たちは人と争うためでも、競うためでもなく、お互いに「ケア」するために造られたのですから。

神という方は今も私たち一人一人の傍らに来られ、苦しむ人、悩む人、涙する人、傷む人の場に自ら赴いています（compassion）。その闇の中で想いを分かち合い、私たちの傷みとともに傷んでいます。そして傷みとともに担い、耐えつつ潜り、あなたらしく生きることを全うできるように協働しているのです。

私たちはこの協働するチームへ参画するように招かれています。そして私たちに、自己の損得を超えて、神の限りない愛の似姿（image）として生きる想起者となるように求めるのです。

社会から小さくされ、散らされた人を集め、だれ一人も失わないようにせよ、これが「教会」の使命なのだ、活動を通して教えられるのです。

いのちに向かって共に生きよ、あの方は今日も招くのです。